

パーソナル・スペースからみた被虐待児の家族関係

今川 峰子・山下 友之*

A Study of Personal Space of Neglected and Abused Children with Their Family Members.

Mineko Imagawa, Tomoyuki Yamasita

*倉敷市少年自然の家

People who are familiar with one another interact at a closer distance. On the other hand, when people initiate an interaction with a dislike, they stand farther apart. Personal space is the concept to these spatial behavior. It is defined as the area with invisible boundaries surrounding a person's body into which intruders may not come.

This study aimed to diagnose the family relationships of neglect and abused children in child welfare facility by measuring personal space. Subjects were 7 boys and 11 girls. The range of age was from 9 to 12 years old. Reason why children lived in welfare facility, was neglect, child abuse and difficulty of nursing by their parents. Participants took part in a simulation by imagining themselves in conversation before being asked to mark the closest point to various people at which they felt comfortable. Interpersonal distances between mother and child were farther in the case of neglect than in child abuse or in control group. Correlations of interpersonal distance and eight scores of emotional evaluation with mother were significant.

Key words

Personal space, Family relationships, Child Abuse, Neglect

. 問題の所在

一. ホスピタリズムと児童虐待

20世紀において、人類は大変に不幸な二つの世界大戦を体験した。この戦争によって、多くの子どもが親を亡くし、戦争孤児になってしまった。戦争という悲惨な体験と、親の死亡という不幸なできごとに遭遇し、身寄りのない子ども達は孤児院で育てられることになった。その後、孤児院で育つ子ども達の追跡調査が実施され、その結果が Spitz (1947) の論文として報告された。この報告のなかでは、乳児期から長期間にわたって孤児院で育つ子ども達の多くが、様々な発達上の障害を抱えている事実が明らかにされたのである。病弱・身体的衰弱・栄養障害などの医学的症候、身長や体重の発達遅滞、運動機能の発達遅滞、情緒表現が乏しい・社会的スキルの乏しさなどの情緒的・社会的障害、ことばの遅れ、知的発達の遅れなどがそれにあたる。これらの障害を総称してホスピタリズム (Hospitalism) という用語が使用された。この報告書は全世界に大

きな衝撃を与え、児童精神科医の Bowlby (1952 / 1967) は WHO を通じて「身体の健康にビタミンが欠かせないように、心の健康のためには母性的養育が必要である」ことを全世界に知らせ、孤児院の環境の改善に大きな力を発揮した。その後、身体的・精神的側面で子どもが健全に発達するには、家庭での母性的養育が最も望ましいとの認識は広く受け入れられ、母性の重要性が強調されることになった。

戦争のない平和な時代に、愛情と安らぎに満ちた安寧の場所であるはずの家庭の中で、親から虐待を受けて死亡する、又は重篤な障害を被る子どもがいることが知られるようになった。一大センセーションを巻き起こした、殴打児症候群 (The battered-child syndrome) に関する Kempe ら (1962) の論文が、アメリカ小児医学雑誌に掲載されたことが契機になったのである。Kempe らは、問題の発生状況について知るために全国的な病院調査を行い、回答を得た71病院から302ケースの殴打児症候群が報告されたこと、また77人の地方検事は同じ1年間に447ケースを取り扱い、うち45人が死亡、29人が恒久的な脳障害を受け、46%が裁判問題となったことを報告している。デンプー病院でも、この事件は普通にあることで、たとえば1961年11月のある1日に4ケースあり、うち2名は中枢神経組織障害で死亡、1人は退院直後不審な死を遂げ、予後良好なのは残りの1人だけであった。子どもの年齢は3歳以下が多く、栄養不良など健康状態も水準以下でネグレクト (放置、養育拒否) の様相を伴うことが多かった (井垣, 1998)。

さて、日本では、小児科医たちが親による虐待の疑いを抱いたとしても、アメリカほどには問題視してこなかった。子は家の宝、子は夫婦のかすがいと見え、大切に慈しむ伝統的な育児が日本の家庭には存在しているとの認識からであった。児童虐待の深刻さに多くの人が気づいたのは1980年代の末からであった。1990年には大阪の児童虐待防止協会によってはじめて「子どもの虐待ホットライン」が設置された。そして全国的規模の「日本子どもの虐待防止研究会」が設立されたのは1996年のことである (花沢, 1997)。厚生労働省の調査 (2001) によると、1990年の児童虐待相談件数は1,100件であったのが、1995年は2,722件、1996年は4,102件、1997年は5,352件、1998年は6,932件、1999年は11,631件、2000年は17,725件と、ここ10年の間に17倍にまで膨れあがってきている。アメリカでは300万件と言われていて、日本より遥かに多い状態にある。しかし、日本でも報道される数は氷山の一角と見られ、相当数の児童虐待が存在すると考えられ、今日では大きな社会問題として表面化してきた。このため、2000年には「児童虐待防止法」が制定され、本格的に対策が講じられるようになってきた。2001年には厚生労働省内に虐待防止対策室が設置され、発生予防、早期発見・早期対応、被虐待児童の適切な保護までの対策がとられるようになった。

二．児童虐待の実態と分類

児童虐待の実態は多様であり、様々な要因が複合していると考えられてきている。加害者が母親であるケースは驚くほど多い。前述の厚生労働省調査からは、実母による虐待の割合が半数以上を占めている。全体に対する実母の割合は、平成10年度 (55.1%)、平成11年度 (58.0%)、平成12年度 (61.1%) と増加している。一方、実父の割合は、平成10年度 (27.6%)、平成11年度 (25.0%)、平成12年度 (23.7%) と相対的に減少している。虐待の相談内容から、今日では、身体的虐待、ネグレクト、性的虐待、心理的虐待の4つに分類している。平成12年度の調査では、総数に占める身体的虐待の割合は50.1%で最も多く、次いでネグレクトが35.6%となっている。心理的虐待は10.0%であり、性的虐待は4.3%と最も低い。総数はすべてにおいて

増加してきているが、総数に占めるネグレクトの割合が増大しているのが近年の特徴である。4つの種類の分類基準を西澤（1995）から引用すると次の通りである。

- (1) 身体的虐待：外傷の残る暴行、あるいは、生命に危険のある暴行（外傷としては、打撲傷、あざ（内出血）、骨折、頭部外傷、刺傷、火傷など。生命に危険のある暴行とは、首をしめる、ふとん蒸しにする、溺れさせる、逆さ吊りにする、毒物を飲ませる、食事を与えない、冬、戸外にしめだす、一室に拘禁するなど）
- (2) ネグレクト：遺棄、衣食住や清潔さについての健康状態を損なう放置（遺棄とは、いわゆる棄児。健康状態を損なう放置とは、栄養不良、極端な不潔、怠慢）。養育の放棄・拒否による虐待として、A 養育の放棄・拒否。B 養育の無知（養育者に育児知識または能力がない）がある。ネグレクトは低所得、生活保護の受給、住宅事情や生活状況の悪さ、教育レベルの低さ、就業率の悪さといった問題と密接に関係しているとする報告もある。
- (3) 性的虐待：性的虐待は、身体的虐待にみられるような身体的外傷を残さないことが多く、また虐待者である大人ばかりか、子ども自身もそうした虐待の事実を秘密にしておこうとする傾向を示すため、四つのタイプのうちで発見が最も困難であるとされている。子どもが虐待を受けた事実を隠そうとするのは身体的虐待などの場合にも見られることであるが、性的虐待においてはその傾向が最も著しいものとなる。
- (4) 心理的虐待：身体的暴行、保護の怠慢ないし拒否、性的虐待を含まない、その他の極端な心理的外傷をあたえたと思われる行為として定義している。養育者により加えられた行為により、極端な心理的外傷を受け、児童に不安・おびえ、うつ状態、凍りつくような無感動や無反応、強い攻撃性、習慣異常等の日常生活に支障をきたす精神症状が生じた状態で、以下の要件を満たすもの。身体的暴行による虐待、養育の放棄・拒否による虐待、性的虐待を含まない。児童の行動と養育者の行動との関連が確証できる虐待とする。

三．子どもの発達にとって、なぜ児童虐待が問題なのか

乳児は決して無能な状態で生まれてきているのではない。1960年代から盛んになったいわゆる「赤ちゃん研究」はそのことを物語っている（Bower, 1977 / 1980）。生まれて直後から新生児は音の方向へ定位する、甘・酸・塩・辛の味覚を識別する、親の声を弁別することができる。そして、2、3ヶ月頃には人の表情を理解する、興味あることがらを持続させるための簡単な仕組がわかるようになるなどがそれを物語る。乳児はコンピテント（有能）であり、学ぶ天才であると表現しても過言ではない。しかし、一方で、自分で食べたり、寒さを防いだり、排泄の処理をしたりすることはほとんど不可能であり、泣くことによって養育者に欲求を訴えることしかできない。

日常生活の中で親の養護の下に、欲求が十分に充足されれば満足感を味わい、安定した平穏な生活を送ることができる。安定した、平穏な日常生活の中で、親への愛着は強化され、親に対する信頼感が培われる。特に乳幼児期の信頼感の形成は、乳児自身の情緒を安定させる働きをする。乳児の情緒が安定し、親を含めて周りの人や事物に信頼感や安心感を抱けば、学びの天才である本領を発揮し、行動的になり、様々なことにチャレンジし、多くのことを学ぶ。

逆に、乳児への養護が不適切であったり、育児を放棄した親の下で育った場合には、乳児は欲求を満足させることができない。飢え、渇き、寒さ、痛さを泣いて訴えても、親が適切に応じてくれないために、不安と欲求不満に満ちた日常生活を送ることになる。しかも、親への信頼感が

形成されていないために、情緒が不安定になる。このため、乳児本来の好奇心は影を潜め、行動は消極的になってしまう。

愛着が強化されることなく育った子どもの発達上の問題は、ホスピタリズムや社会的隔離児の研究から既に示唆されている通りである。子どもが様々なことを学ぶには、養育者との愛着の形成が学習の基礎に関与することは次の事例から理解できる。幼児期に十分な養育を受けることなく、粗末な小屋に閉じ込められて育てられていた6歳と5歳の兄弟が、近所の人からの通報で救出され、保護された。内田(1989)は、養育者との愛着関係が子どものさまざまな学習の基礎になっていることをうかがわせる事例として紹介している。彼女は救出後の回復に向けたトレーニング計画に加っている。そして、救出された子どもが、担当保母と親密な関係を成立させるようになったことが契機で、他の保育者や仲間とのコミュニケーションができるようになり、知的・言語的側面での遅れが急速に改善されたと報告している。

虐待を受けて育った子どもの発達上の問題は、ホスピタリズムと共通した側面がある。身長や体重の発達遅滞、運動機能の発達遅滞、情緒表現が乏しい、社会的スキルが乏しいなどの情緒的・社会的障害、ことばの遅れ、知的発達の遅れなどは、虐待を受けた子どもにも該当する。特に育児放棄や身体的虐待を受けて育った子どもに共通して認められる人格的な特徴として、過度な攻撃性、貧困な自己概念、他者を信頼する能力の欠如、人間関係における逸脱行動、不適切な愛着行動である(西澤, 1995)。

児童養護施設に保護された被虐待児の行動を観察すると、他人に対する言語的・身体的な攻撃が普通児よりも頻発する傾向にある。しかも、攻撃行動が激しい。その一方で、無差別愛着と表現されるように、年齢に不相応な抱きつきや甘えが多く出現する。そして、他者との信頼関係がなかなか築かれにくいなど、人間関係を営む上で障害を示しやすいことが指摘されてきている。

四．児童虐待の原因と発生する場所について

虐待を生む原因として、親自身が思慮深さに欠け、衝動的で、自己中心的な人格によるもの、発達障害や病弱など、子ども自身がハンディを抱えている場合、親の期待を裏切る子どもの行為や度を越えた体罰など、親子の相互作用に起因するもの、片親家族、核家族、拡大家族など家族形態に規定されて派生する場合、家族の経済状態や劣悪な生活環境によるもの、ムラ社会の崩壊と都市化など家庭や社会の教育力の低下などによるものが挙げられる。これらの原因が複合して、虐待を多く生み出す結果となっている。

ただ、共通して言えることは、虐待は家庭の中で行われ、育児を担う母親による虐待の割合が最も高く、次いで父親であり、親が我が子を虐待する構図になっている。虐待が発生する場所としての家庭は一次的テリトリーであるとAltman(1975)が言うように、他人の侵入を排除し、安全に子どもを産み、育てる場所のはずである。そこでは、血縁を中心にした親密な家族の人間関係が営まれる。テリトリーとしての家庭は人間にとって、精神的な健康を維持するのに重要な役割を果たしている。安全とプライバシーを確保することができる、人に邪魔されずに自由に振舞い、リラックスできる場所である。しかし、その一方で暴力行為が無制限にエスカレートする可能性を秘めている場でもある。要するに、家庭は最も親密な人間関係の上に成り立った集団であるが、この親密さは大変に不安定であって、愛情と憎悪、安心と不安、自由と拘束のアンビバレントな二面性を含んだバランスの上に成り立っている。親密な相手が憎しみの対象となる離婚、嫁姑の葛藤、育児に非協力的な夫への不満、子育ての不安、家事・育児による拘束など、家庭が

社会から隔離され、プライバシーが守られる集団ゆえに、表面化することがなく、ストレスは家庭内に広がる。

多くの家庭は、このような親が抱える様々なストレスを、親密な関係を保ちつつ、うまく解決する方向へと進む。離婚からの立ち直り、就職、地域の子育てサークルへの参加、夫の育児参加、子どもの自立など、様々な方略によって、親のストレスは解消されていく。

しかし、一部の親はストレスのはけ口を子どもへの暴力に求める。親子関係は親密な関係であるがゆえに、親の思い通りにならない我が子にイライラして、親が安易に子どもを殴りつけてしまう。これが身体的虐待のメカニズムであろう。

離婚、夫婦間のトラブル、経済的貧困、育児不安などを抱え込んだ親が、ストレスから逃れるために、育児や養育そのものを放棄してしまう場合、又は家族を構成している親自身が家庭から蒸発する場合などがある。いずれもこれは、家族が抱え込んでいる困難な事態から逃避することであり、育児や養育を放棄する（ネグレクト）になる。

五．被虐待児の親との関わり

被虐待児が示す行動上の問題として、行動の自己抑制が弱いため衝動的であり、攻撃行動は過度になりやすいこと、他人への信頼感が薄いため、不相応な無差別愛着と不信感・猜疑心を抱きやすいなどアンビバレントな側面を合わせもつことにある。おそらく、これらの行動特徴は、一般には乳幼児期・幼児期を通じて、安定した親子の信頼関係が形成されていないことによる。

親からの保護を必要とする乳児は、親との距離を接近させるしぐみを生得的に備えている。Bowlby（1969 / 1976）は愛着行動は生得的であり、乳児が母親から離れすぎてしまったと感覚器官が識別したときに、その距離を縮めるように始動しはじめる制御系であると述べている。要するに親の養護を必要とする乳児は、親から離れないように親を引き止めるような信号を送り、親に接近する行動を生得的に備えることによって、子どもの生存を保障することになる。このような愛着行動は、親と子どもの距離を接近させ、コミュニケーションを密接にする役割を果たす。これが親子の親密な関係を成り立たせ、親に対する信頼感を形成することになる。

しかし、親による虐待が頻発する環境で育った乳児は、生得的に備えた親への愛着行動を強化させることができない。親への接近は親からの暴力という形で撥ね返るために、親密な親子関係に発展しない。この場合に乳児がとる行動は二つに分かれることになる。一つは親への接近を諦め、親への愛着を否定することによって、親からの暴力をうまく回避することである。しかし、親は常に暴力を振るうのではなくて、情緒が安定し、機嫌のいい時には子どもを引き寄せ、可愛いがる。愛情を示す優しい親と暴力を振るう親の二面性を子どもに示すために、子どもは常に親の顔色を伺い、猜疑心を募らせ、親への対処の仕方を決めることになる。もう一つは、親の行動を絶対視して、自分自身が悪い子と自己評価し、自虐的になることで親の暴力行為を納得させてしまう。その背後には、自分みたいなどうしようもない悪い子は、親から捨てられてしまうのではないかとの、強い不安感がある。この不安感によって、子どもは必死で親にしがみつ়くことになる。子どもは叩かれれば叩かれるほど親にしがみついていくという、非常にパラドキシカルな状況に陥る。前者はネグレクトの場合に出現しやすい子どもの行動であり、後者は身体的な虐待のメカニズムに相当すると考えられる。

六．親子関係の変化と友人との交流

親への愛着を強化した子どもであっても成長するにしたいが、親との距離は広がっていく。これは親との絆が弱くなるのでも、親への信頼感が薄くなるためでもない。乳児期のような密着した距離を取らなくても、すでに形成された情緒的な信頼感を基礎として、子どもは親との距離を広くとれるようになるためである。

なぜ、親子間の距離が広がるのかについては、次のような要因が関与すると考えられる。第一に、乳児が生来的に備える好奇心と運動機能の発達により、親から離れて自由に探索することを子ども自身が好むようになるためである。第二に、親は子どもの自立を促すために、子どもが親から離れるのを奨励し、逆に親にまつわりつくのを叱るようになる。子どもが大きくなるほど親との距離が離れるのは、親や他の大人から、一定の距離をとるように強化される結果によるとの社会的学習理論から説明できる (Duke & Nowicki, 1972)。第三に、離乳期の二ホンザルでは、母親から子への攻撃行動が多発し、相対的に母親主導な離乳過程が見られるように、人間の母子関係も親和性を前提とした求心的システムだけが機能するのではなくて、分離するダイナミズムが働くためと考えることができる (根ヶ山, 1995)。

ただ、動物の親子は一旦子離れが成立すると、もう親子関係を継続することはなくなるが、人間の親子関係は生涯にわたって親密な関係を継続する場合が多い。親子の関係は、子どもの成長にしたがって様相を変化させると考えるのが妥当である (柏木, 1998)。親が子を抱え込む関係

親が子を危険から守る関係 子が困った時には支援する関係 子が親から信頼・承認されている関係 親が子を頼りにする関係へと、子どもの成長に従って変化する (落合, 1996)。

このように、子どもが親から離れていく過程には、親が子どもへの養育態度を変化させるため、子ども自身が成長するため、そして 家庭の外で広がる友人との人間関係が、さらに青年期には、異性の友人との親密な関係が重要な役割を果たす。家族以外の人々との交友関係を結ぶことは、子どもの社会的スキルを発達させ、親からの自立を促すことになる。

．本研究の目的

人と人が交流するとき、相手に応じてことば遣い、相手との位置、しぐさ、態度、表情などを変える。その上で、親密な関係を結びたいと望む相手に対しては、一つにはことばでそのことを直接伝える方法をとるが、その他の手段として非言語的行動により自分の思いを伝える。相手に接近する、視線交差を多くする、微笑する、身体を傾けるなど、しぐさや態度という非言語的行動で表すことがそれに当たる。これらの行動の中で、相手への親密性を最も効果的に伝達するのは対人距離であり、対人距離が接近しているほど好意的な態度を相手に伝えることができる (Mehrabian, 1969)。人とコミュニケーションする場合の対人距離を決定するのは、パーソナル・スペースが大きな役割を果たしている (Hayduk, 1983)。パーソナル・スペースとは、相手から侵入されると不快感を抱き、それを回避するような、自己の身体を取り巻く空間領域を意味し、日常生活で見せる対人行動やコミュニケーション行動を説明する概念として知られている (Sommer, 1969 / 1972; Hall, 1966 / 1970)。特に親密な相手になるほど、疎遠な関係にある人よりも、パーソナル・スペースは小さい (青野, 1979; Ashton, Shaw, & Worshman, 1980; Bell, Kline, & Barnard, 1988; Ford, Knight, & Cramer, 1977; Guardo, 1969; Hall, 1966 / 1970; Meisels & Guardo, 1969; 渋谷, 1987)。

今川（1993）、今川ら（2000、2001）は、投影的な方法によりパーソナル・スペースを測定して、家族の人間関係に着目して、親と子、友人、夫婦の心理的な関係を把握することを試みてきた。これまでの研究を通して、親子の距離は発達段階によって異なってくることをが認められている。それは親と密着した乳児期から、身辺の自律により母子分離が可能になる幼児期、そして親との関係以上に友人と緊密な関係を結ぶ児童期と、親子間の距離は広がっていく。児童期後期には、子どもが親から離れて仲間と交わることを優先させる時期がある。親密な相手を親に求める時期から、親と共に親友へもそれを求めるようになる。今川（1993）の調査結果からは、児童期後期になると、男女共に対人距離が最も接近する相手が、母親・父親から親友へと代わることが認められる。

被虐待児の社会的スキルを、親や友人に対するパーソナル・スペースにより測定すると、ネグレクトと身体的虐待では異なった様相を示すと予想される。ネグレクトにより保護された児童は、幼少期に親との愛着を強化することができず、児童期になっても親との関係が親密でない。このため、親密さを反映するパーソナル・スペースは広いと予想される。しかも、親との安定した信頼関係が成立していないために、周りの人々に対して親密な関係が築きにくいことが予想される。このため、施設の職員、友人と接近した距離で交わることがないケースもあると予想される。ただ、内田（1989）が社会的隔離児について述べているように、児童期であっても施設の保母との愛着を形成したケースでは、認知的・社会的スキルの改善が認められている。このように、ネグレクトによる幼少期の愛着形成が失敗したとしても、児童養護施設での人間関係のあり方によっては、年齢にふさわしい社会的スキルを獲得することができると考える。

身体的虐待については、親の虐待にもかかわらず、子どもは親の行動を絶対視して自虐的になり、親にしがみつく。親から捨てられてしまう不安を抱くために、ネグレクトの場合とは異なり、親とのパーソナル・スペースは接近したままである。親から暴力を受けても親にしがみつくという構図になっている。このように、最も親密な相手である親との関係が不安定なために、友人との関係でも、ネグレクトと同様に、親密な関係がもてないケースもあると予想される。

両親だけでなく、友人やその他の人物へのパーソナル・スペースを測定することは、被虐待児の社会的スキルを診断することにもつながる。

この研究では、被虐待児を対象にして家族・友人とのパーソナル・スペースを測定し、ネグレクトと身体的虐待の違いを明らかにすることを第一の目的にしている。次いで、家族・友人に対する情緒的評価を評定法を用いて実施し、パーソナル・スペースの測定結果と関連させて考察することが第二の目的である。

．研究の方法

(1) 被験者の年齢

幼児から高校生までを5つの家で、グループホーム形式で養護を実践しているJ児童養護施設の児童を対象にした。小学3年女児1名、小学4年男児1名、小学4年女児5名、小学5年男児3名、小学5年女児5名、小学6年男児3名の合計18名である。

(2) 入所理由

これらの児童の入所理由は、離婚による母子家庭で、母親の養育放棄のため、母子家庭で母親の失踪、父親は行方不明のため、母子家庭で母親が失踪、親族の状況が不明のため、両

親は健在であるが、実父からの身体的虐待のため、母子家庭で、母親が拘禁されたため、実父、継母、祖父母（父方）と同居であったが、特に継母、実父からの身体的虐待が激しく、措置入所、母子家庭で、母親の養育困難（長期入院、知的障害）のため、母子家庭で兄の家庭内暴力を避けるために措置入所、母子家庭で母親が拘禁、残された祖母が養育困難なため、両親の行方不明、祖父の養育困難、離婚による母子家庭で母親からの身体的虐待、両親の自己破産などであった。

(3) パーソナル・スペースの測定とアンケート調査について

本研究で使用したのは、投影法によりパーソナル・スペースを測定するための検査用紙と、父親・母親・兄弟・同性友人・異性友人との信頼関係について質問するアンケート用紙である。

シミュレーション法によるパーソナル・スペースの測定には、人物をシルエットとして提示する場合（井原，1981；Guardo，1969）があるが、年齢の違う家族メンバーを弁別するには不十分なため、今川（1993）と同じものを使用した。そして両者が向きあうように被験者自身が貼り付ける方法を用いた。対象とした人物は、1)父親、2)母親、3)兄、4)弟、5)姉、6)妹、7)祖父、8)祖母、9)寮職員（男性）、10)寮職員（女性）、11)同性友人、12)異性友人、13)見知らぬ男性、14)見知らぬ女性の14人の人物である。14の異なった人物が1ページにつき1人づつ描かれ、それぞれの人物に対して、自分自身と見立てたシールの人物が話をする場面を想像し、気づまりにならない程度まで接近した位置にそのシールを貼りつける作業を求めた。教示内容は冊子の表紙に印刷した。その内容は、「この冊子には、大人や子どもが描かれています。それぞれ異なった人物とあなたが話す場面を想像して下さい。そして、切り抜きの絵をあなただと思って、あなたがある人物と話している場面をつくって下さい。絵に描かれた人物を考慮し、あなたと相手の人物が気づまりにならない程度まで接近した位置に、あなた自身である切り抜きの人物を貼りつけて下さい。該当する人物がない場合にはやらないで下さい」と印刷し、口頭で教示した。該当する人物がない場合には、貼りつけないことを徹底するために、その部分のみを太字で印刷をして口頭でも十分注意するよう指示をした。冊子内の人物の大きさは、厚生省の身長測定の対象年齢を1：25に縮小した人物を使用した。

(4) アンケート調査の項目について

実父母、兄弟、義父母、寮の職員、祖父母、同性友人、異性友人、見知らぬ人物（男女）に対する印象を評価する項目を、それぞれ8項目用意した。それぞれの項目に対して、4段階に評定をしてもらった。その項目は、父親・母親に対しては、項目1「お父さん（お母さん）のことを尊敬している」、項目2「お父さん（お母さん）がいると安心する」、項目3「お父さん（お母さん）が怖い」、項目4「お父さん（お母さん）がいると楽しい」、項目5「お父さん（お母さん）がいないと寂しい」、項目6「お父さん（お母さん）のことを頼もしく思っている」、項目7「お父さん（お母さん）と話にくい」、項目8「お父さん（お母さん）は優しい」の8項目である。義父母、寮の職員、祖父母についても同様の評定をしてもらった。

同性の友人・異性の友人に対しては、項目1「お父さん（お母さん）のことを尊敬している」のみを「同性の友人（異性の友人）を大切に思っている」に変更した項目を使用した。その他の7項目はすべて同じであった。

(5) 実施期日、実施方法

平成13年11月に「児童養護施設を訪れ、個別にパーソナル・スペースの測定とアンケート調査を実施をした。

結果

(1) 母親との対人距離

パーソナル・スペースは被験者と相手の人物が、気づまりにならない程度まで接近した時の対人距離によって測定した。ほとんどのシールが基準線に沿って貼り付けられていたために、2人の人物間の距離を靴の爪先間の距離（対人距離）として、14人の異なった人物すべてのケースをまず測定した。ほとんどの被験者が向かい合うようにシールを貼りつけていたが、背中合わせの状態に貼ったケースが認められた。ケース1とケース7については、見知らぬ男性と見知らぬ女性に対して背中合わせで貼り付けたため、マイナスで表示した。18人の被験者の虐待の種類と対人距離を表示したものが Table 1 である。18名の被験者のうち、ネグレクトが11名、身体的虐待が3名、親の事情による養育困難が3名、家庭内暴力からの避難が1名である。

Table 1 虐待の種類と父母・兄弟・友人等との対人距離

被験者番号	虐待の種類	年齢	性別	父親	母親	兄	姉	弟	妹	祖父	祖母	寮父	寮母	同性友人	異性友人	見知らぬ男性	見知らぬ女性
ケース 1	ネグレクト	10歳	女兒	57	15		4				150	173	35	18	6	- 29	6
" 2	ネグレクト	10歳	女兒	13	7		7				88	74	5	4	159	173	158
" 3	ネグレクト	9歳	女兒	32	28			15		40	18	17	13	13	62	155	168
" 4	ネグレクト	10歳	男児	63	46	11	12			175	170	48	55	6	192	60	58
" 6	ネグレクト	11歳	女兒	25	13	20			40	27	14	36	18	9	20	57	67
" 7	ネグレクト	12歳	男児	19	28			8	9			24	20	22	18	- 25	- 33
" 8	ネグレクト	10歳	女兒	26	16	59		27				39	58	19	39	65	58
" 11	ネグレクト	9歳	男児	28	72	9	63			27	8	30	20	9	37	28	33
" 13	ネグレクト	11歳	女兒	111	67	57	23				140	81	31	14	6	172	158
" 14	ネグレクト	11歳	女兒	79	168	96				41	39	84	49	31	42	65	58
" 15	ネグレクト	10歳	男児	70	79	49			34	97	45	102	73	41	51	77	62
" 5	身体的虐待	10歳	女兒	15	25			16	21			26	48	17	20	43	18
" 10	身体的虐待	10歳	女兒	8	8				5	28	4	88	3	133	5	177	55
" 16	身体的虐待	10歳	女兒	168	7			79	50	158	146	57	50	32	55	114	124
" 9	家庭内暴力	12歳	男児	37	27	49						39	38	28	4	22	12
" 12	養育困難	11歳	女兒	19	18	15	20			21	21	24	16	15	16	14	8
" 17	養育困難	11歳	男児	50	13					85	88	51	77	37	114	23	177
" 18	養育困難	12歳	男児	20	15	15				36	27	50	38	34	18	22	68

(-) の数値は背中合わせに貼付されたケース 数字 (mm)

離婚、父親の失踪などによる母子家庭が多いため、まず母親との対人距離に着目してその距離を図示したのが Figure 1 である。折線グラフの実線は、今川 (1993), 今川ら (2000, 2001) から男性の対人距離の平均値を、破線は女性の平均値を示したものである。被虐待児の対人距離を男性は 印で、女兒については 印で表示した。

母親との対人距離が極端に離れていると判断される者は、圧倒的にネグレクトが多い。ネグレクトにより、母親との情緒的・心理的なつながりが弱いため、パーソナル・スペースが広いと考えられる。人物シールは 1 / 25 に縮小されているため、実数値に直すと、ネグレクトの場合、11人中7人は母親との距離が70cm以上離れている。ケース1とケース2については例外的に接近していた。二人は双子の姉妹であり、母親のネグレクトにより措置入所したケースである。Table 1 より、姉妹間の距離が接近していることから、幼少期に姉妹間の愛着は強化され、情緒的・心理的な絆が形成されているものと考えられ、同じ家族である母親にも、パーソナル・スペースは接近しているのであろう。

身体的虐待については、ネグレクトのケースに比較して、母親との距離が接近していることを、Figure 1 は示している。実数値に直して、母親との距離を表すと、ケース5は62.5cm、ケース10は20cm、ケース16は17.5cmである。ケース5の女兒は、父親からの身体的虐待が激しいケースで

あるが、父親との距離は母親以上に接近している。ケース10の女兒は、実父、継母、祖父母と周りの大人から身体的虐待を受けているケースである。ケース16の女兒は、離婚による母子家庭で、実母からの身体的虐待が激しいために、措置入所になったケースである。このケースも実母とのパーソナル・スペースは接近している。要するに、ネグレクトと異なって、身体的虐待の場合には、虐待の理由を自分が悪い子であると過小評価し、親から捨てられることの不安を抱き、たとえ親に叩かれてもしがみ付くために、母親や祖母に接近するというパラドキシカルな構図になっ

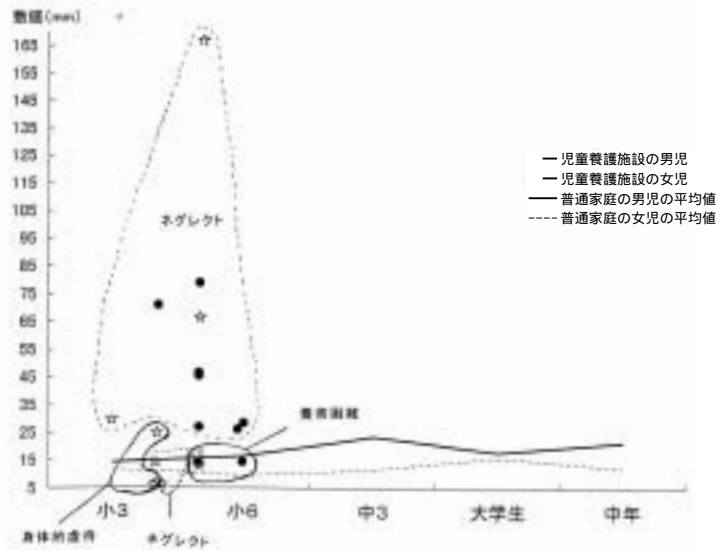


Figure 1 母親との対人距離

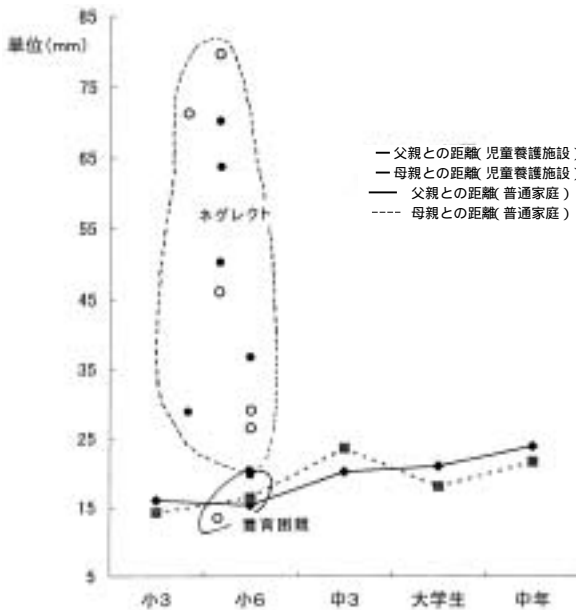


Figure 2 父母との対人距離(男児)

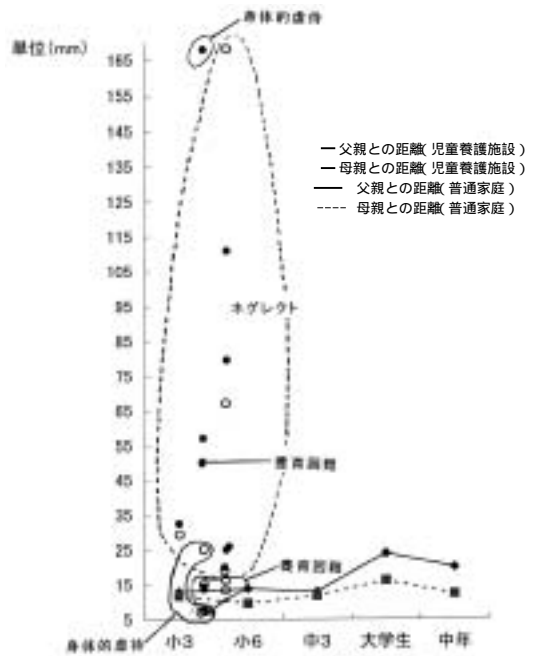


Figure 3 父母との対人距離(女児)

ている。

養育困難と判断した3名については、虐待の範疇に入らないケースである。母子家庭で母親の精神障害による長期入院、母子家庭で母親の知的障害、両親の破産の3つのケースは、一般家庭の子どもの対人距離とほとんど違いが認められていない。

ケース9の母子家庭で兄の家庭内暴力を避けるための措置入所のケースは、母親との距離も離れているが、それ以上に暴力を振るう兄との距離は広い。

(2) 父親・母親との対人距離についての男女差の検討

Figure 2 と Figure 3 は、父親・母親との対人距離を、男女別に図示したものである。児童養護施設へ入所した児童の家庭の多くが母子家庭であるため、父親と同居していないケースが多い。このため、父親との対人距離は、別居する以前の父親をイメージして貼り付けたものになっている。男児の場合に、父親・母親共に距離が大きいのはネグレクトの場合である。養育困難の場合にはいずれも両親との距離は小さい。女兒についても、男児同様にネグレクトの場合に距離が大きい。身体的虐待は女兒のみであるが、母親・父親共に接近している。ただ、ケース16は離婚に

Table 2 母親への評価得点

被験者番号	虐待の種類	年齢	性別	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8
ケース1	ネグレクト	10歳	女兒	1	1	4	1	1	1	4	1
" 2	ネグレクト	10歳	女兒	1	1	4	1	1	1	4	1
" 3	ネグレクト	9歳	女兒	1	1	4	3	1	3	4	1
" 4	ネグレクト	10歳	男児								
" 6	ネグレクト	11歳	女兒	1	1	3	1	1	1	4	1
" 7	ネグレクト	12歳	男児	2							
" 8	ネグレクト	10歳	女兒	2	2	4	2	2	2	3	1
" 11	ネグレクト	9歳	男児								
" 13	ネグレクト	11歳	女兒	3	4	4	4	4	3	3	1
" 14	ネグレクト	11歳	女兒	4	4	1	4	4	4	1	4
" 15	ネグレクト	10歳	男児	3	4	1	3	3	3	3	3
" 5	身体的虐待	10歳	女兒	1	2	3	1	2	3	3	1
" 10	身体的虐待	10歳	女兒	1	1	4	1	1	1	4	1
" 16	身体的虐待	10歳	女兒	3	1	4	1	1	2	4	1
" 9	家庭内暴力	12歳	男児	1	1	1	1	1	1	1	1
" 12	養育困難	11歳	女兒	1	2	2	1	1	1	1	1
" 17	養育困難	11歳	男児	2	1	3	1	1	1	4	1
" 18	養育困難	12歳	男児	1	1	4	2	2	1	4	1

注) 評定値は小さいほど該当することを示す

- 項目1 : お母さんのことを尊敬している
- 項目2 : お母さんといると安心する
- (逆) 項目3 : お母さんが怖い
- 項目4 : お母さんといると楽しい
- 項目5 : お母さんがいないと寂しい
- 項目6 : お母さんのことを頼もしく思っている
- (逆) 項目7 : お母さんと話しにくい
- 項目8 : お母さんは優しい

Table 3 対人距離との情緒的な評定値との Pearson の相関係数

	母親との距離	父親との距離	同性友人との距離	異性友人との距離
項目1	00.753 **	0.350	0.666 **	0.383
項目2	0.826 **	0.530	0.582 *	0.062
項目3	-0.597 *	0.359	0.027	0.018
項目4	0.795 **	0.709 **	-0.136	0.163
項目5	0.833 **	0.276	0.330	0.318
項目6	0.767 **	0.525	0.376	0.126
項目7	-0.546 *	0.052	-0.746 **	-0.217
項目8	0.917 **	0.150	0.612 *	0.296

** P < .01

* P < .05

- 項目1 : お母さんのことを尊敬している
- 項目2 : お母さんといると安心する
- (逆) 項目3 : お母さんが怖い
- 項目4 : お母さんといると楽しい
- 項目5 : お母さんがいないと寂しい
- 項目6 : お母さんのことを頼もしく思っている
- (逆) 項目7 : お母さんと話しにくい
- 項目8 : お母さんは優しい

注) 友人の場合には項目1についてのみ、同性(異性)を大切に思っているとした

よる母子家庭で、実母からの身体的虐待のケースであるが、母親とは接近しているが父親とは異常なほど離れている。離婚により同居していない父親とは、情緒的・心理的つながりが極めて薄いと考えられる。対人距離が離れているのは、男女共にネグレクトのケースである。女儿の場合には、ネグレクトであっても、母親と接近しているケースも認められた。

(3) 人物に対する印象と対人距離について

母親に対する8項目の評価が、虐待の種類によってどのような関連があるのかを、18人について表示したのがTable 2である。これらの評価と対人距離の関係を表示したのが、Table 3である。母親への8項目の評価と対人距離には有意な相関が認められた。例えば項目2の「お母さんがいると安心する」は、母親との対人距離との相関値は+0.826であり、この二つの変数は関連性が高い。一方、項目3の「お母さんが怖い」では-0.597である。この二つの変数は、マイナスの関係として関連性が高い。

母親については、8項目全てについて、相関値は統計的に有意であった。しかし、父親については、項目4の「お父さんがいると楽しい」のみについてしか有意な相関が認めなかった。父親の評価と対人距離が統計的に有意な相関を示さなかったのは、対人距離と人物への評価が関連しないと判断するよりも、入所児童の多くが母子家庭であるため、父親と同居していないことによるためであろう。ネグレクトの場合には、母親との距離は大きいですが、情緒的な評価についても、マイナスの評価が高いことを示している。一方、身体的虐待については、親への評価はネグレクトに比較してプラスの評価に傾いていることになる。

同性の友人については、対人距離と項目1の「同性の友人を大切に思っている」とが0.666、項目2の「同性の友人といると安心する」とが0.582、項目7の「同性の友人と話しにくい」が-0.746、項目8の「同性の友人は優しい」が0.612で4つの項目が統計的に有意であった。

(4) 個々のケースについての検討

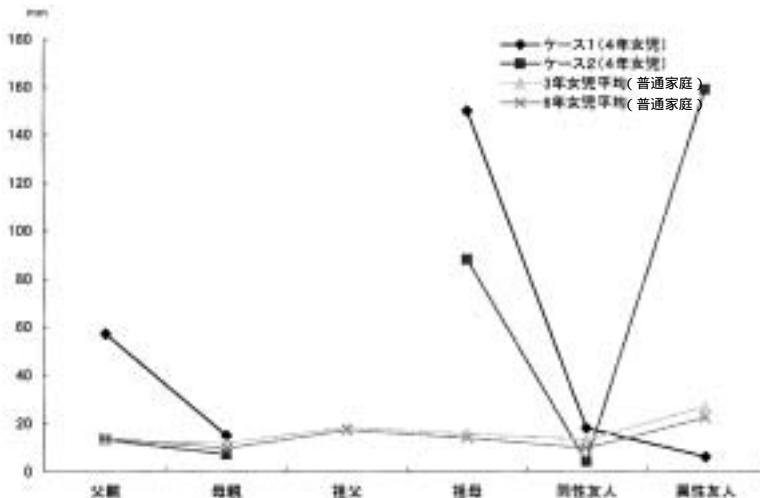


Figure 4 ネグレスト(ケース1・2)の対人距離

Figure 4は母子家庭で母親のネグレクトにより、姉妹で施設に入所しているケースである。姉妹の距離はTable 1に示すように接近し、姉妹間の愛着は形成されていたことを十分に予想できる。母親からネグレクトされていても、母親との距離が接近している例外的なケースである。祖

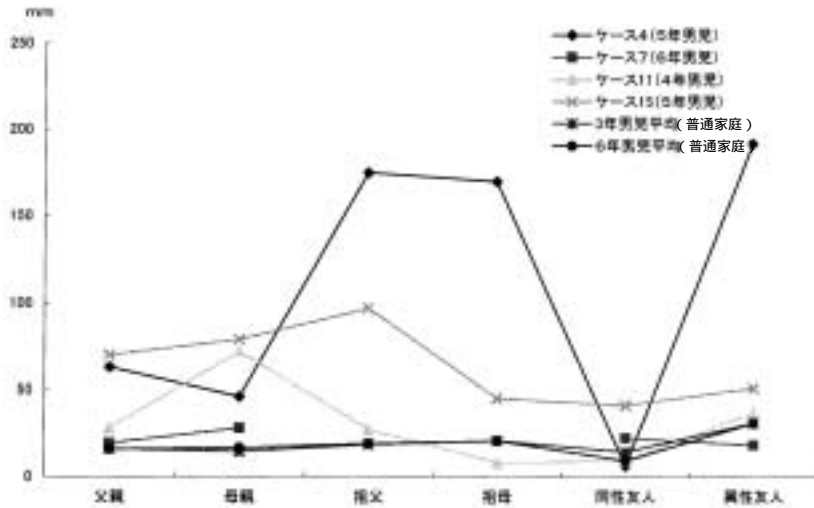


Figure 5 ネグレクト (男児：ケース4・7・11・15)

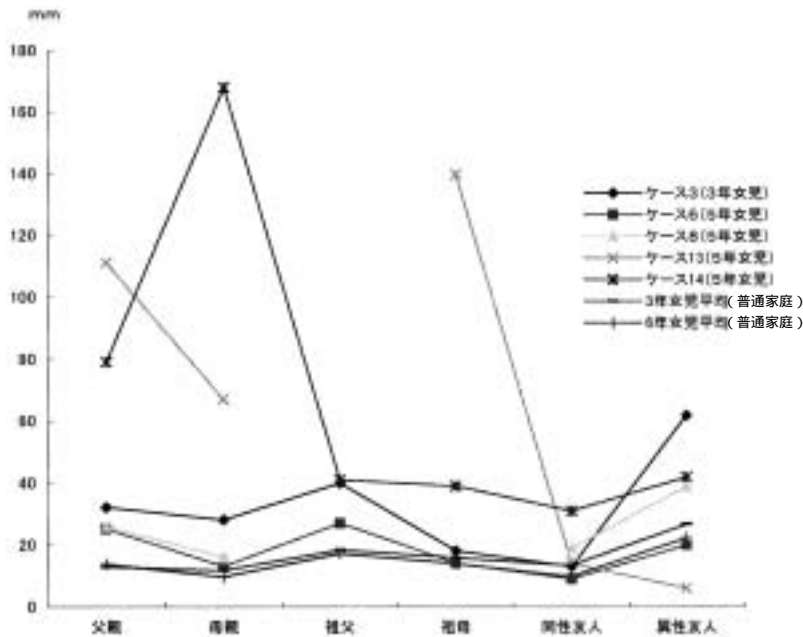


Figure 6 ネグレクト (女児：ケース3・6・8・13・14)

母との距離が極端に離れ、祖母への愛着が極めて薄いことを推測させる。要するに、母親の育児放棄を祖母が支援できないため、祖母も愛着の対象になり得ない、厳しい家庭環境を読み取ることができる。

Figure 5 はネグレクトの事例を4ケースについてまとめたものである。父親・母親との距離が離れ、ケース4は母子家庭で母親が行方不明になり措置入所したものである。祖父母と異性友人には極端に離れた距離をとっている。ケース15は両親共に行方不明となり、3人の兄弟が残され、2人は同じ施設に入所している。Table 1に示すように、兄との距離、両親、祖父母、友人すべて離れた距離をとっている。これらの二つのケースは、家族や友人にたいするパーソナル・

スペースからは、周りの人物に対して親密な関係を築くことができないケースとして診断できる。おそらく、ケース15は、極めて不十分な社会的スキルしか獲得していないと考えられる。

Figure 6 は女兒のネグレクトをまとめたものである。ケース13は特に父親・母親・祖母との距離が大きい。親族への絆が薄いか、強い敵意や反抗を示していると思われる。ところが、その一方で、異性の友人との距離が極めて小さい。年齢不相応と判断されるほど、母親との距離以上に、異性との距離が接近している。異性の友人の場合に、情緒的評価の得点と対人距離は有意な相関が認められていない。要するに、異性に信頼性や親密性を抱くゆえに、男性に接近するとは限らないのである。児童養護施設の少女達が、早くから異性と性的な関係を持ち、期せずして親になってしまうことが報告されるが、この問題の危険性を予知するようなケースである。男児も女児も、親のネグレクトは思春期から様々な問題行動として顕在化する。母親との絆の弱さの上に、反抗・敵対が加わり、一つには同性や異性の友人に信頼感を抱けず、親密な関係を営む関係にまで発展しない。もう一方で、男女とも早くから異性と異常に接近し、性的関係を結ぶが、深い信頼関係まで至らないことにある。

Figure 7 は身体的虐待のケースを示したものである。ケース5は父親からの虐待によるものであるが、父親とは接近した距離をとっている。ケース10は父親、継母からの虐待が激しいが、いずれも接近した距離をとっている。祖母からも虐待を受けているにも関わらず、加害者である親に接近している。ところが、同性の友人との距離が極端に離れ、逆に異性の友人には接近している。ケース16は離婚による母子家庭で母親からの虐待が激しいために措置入所したケースである。虐待をする母親とは接近しているがその他の人物とは離れた関係にあることがわかる。

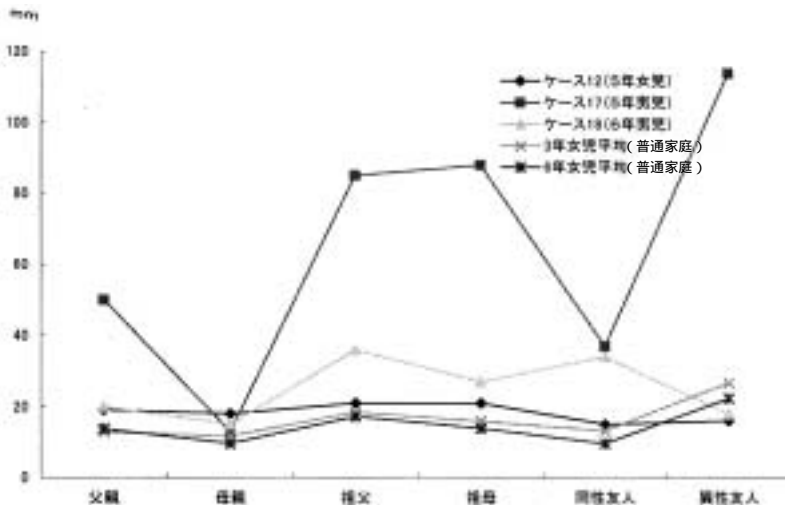


Figure 8 養育困難 (ケース12・17・18)

Figure 8 は養育困難な児童について対人距離を示したものである。ケース17のみが極端に離れた距離を示している。

・考察及び今後の問題として

虐待を受けて育った子どもの発達上の問題は、情緒表現が乏しい、社会的スキルが乏しいなど

の情緒的・社会的障害，ことばの遅れ，知的発達遅れなどが指摘されている。本研究では，社会的スキルの一つの指標として，親密な関係を反映するであろうパーソナル・スペースによって親子関係，友人関係について検討した。

ネグレクトでは幼少期に親との愛着を強化することができず，児童期になっても親との関係は親密ではない。このため，親密さを反映するパーソナル・スペースは普通家庭の児童と比較して広がっていた。しかも，親との安定した信頼関係が成立していないために，祖父母や友人とのパーソナル・スペースも大きく，親密な関係を築くことが難しいケースが認められた。一方で，母親や同性とは離れ，逆に異性との距離が極端に小さいケースも認められた。年齢不相応な異性への接近が，不純異性交友や安易な同棲に移行する危険性を予想させる。

身体的虐待については，親の虐待にも関わらず，親の行動を絶対視して自虐的になり，叩かれれば叩かれるほど親にしがみつく。親から捨てられてしまう不安を抱くために，ネグレクトの場合とは異なり，親とのパーソナル・スペースは接近したままである。ネグレクトでは親とのパーソナル・スペースは広く，身体的虐待では逆に小さいことは，本研究で測定したパーソナル・スペースから実証された通りである。児童養護施設に保護された被虐待児の行動を観察すると，他人に対する言動的・身体的な攻撃が普通児よりも頻発し，友人と親密な関係を営みにくい。その一方で，本来ならば幼少期に親密な相手に示す愛着が，無差別愛着と表現されるように，年齢不相応で，相手との関係を考慮しない抱きつきや甘えとして表出される。このように，人間関係を営む上で障害を示すが，結局これは，幼少期の親子関係の障害と施設に入所してからも不安定なままの親子関係に由来するのであろう。

被虐待児の問題は，親子関係という閉じた家庭内の問題ではあるが，これが祖父母や兄弟，さらに友人を含めた様々な人々との人間関係に影響するであろうことを，本研究では指摘した。家族は親子で成り立っているのではなくて，兄弟，姉妹や祖父母を含む有機的な組織として捉えることができるであろう。親子が歪んだ関係であっても，兄弟，姉妹や祖父母との親密な関係が築かれることによって，全体として補完されることは十分に考えられる。ただ，家族の単位が，大家族から核家族，さらに片親家族へと変化し，子どもも数が減少するなかで，他の家族による補完が困難になってきた点が児童虐待を増加させている要因の一つであろう。

19世紀から20世紀に問題とされたHospitalismは，施設そのものの貧困な人的・物理的環境が原因であったが，WHOによる改善の結果，それほど問題となっていない。例えば，満4歳になるまでに長期間，小児結核のために家庭から療養所に隔離された経験をもつ60名の児童・青年を対象として，乳幼児期の親からの分離体験の影響が検討された。比較のために，年齢と性の条件が同じコントロール群を選んで，比較がされた結果，母子分離を体験した子どもは，引込み思案で集中力に欠けると判断されたが，両群間の差はほとんど見られなかった。幼児期に長期間家庭から離れることが，非行や友人を作ることができないといった深刻な問題行動につながるという結果は認められていない(Bowlby & Ainsworth, 1956)。イギリスでは大規模な調査によるデータが収集された。追跡調査に参加した約16,000名の子どものうち，253名が7歳までに，414名の子どもが11歳まで施設入所の経験があった。これらの施設児に対する教師の評価は，施設経験のない子どもと比較して社会的な適応の程度が低いと判断された。大人に対して反抗的で攻撃的であると見なされた。しかし，施設に入所した児童の社会階層，非嫡出，住宅内の密度，家族構成などを考慮すると，施設入所による問題ではなくて，入所するまでの家族環境による影響が大きいと判断されたのである(Lambert et. al., 1977)。親との分離体験そのものが，子どもの

発達にとって悪影響となるのではなくて、むしろ施設に入所する前の、子どもの家族が抱える様々な事柄がすでに児童の適応を悪くしている点に注目しなければならない。児童が施設に入らざるを得ないような崩壊家庭で育っている点に問題がある（Schaffer, 1990/2002）。要するに、児童養護施設に入所していても、親子の関係は持続しているため、両親を含めて家族の関係を改善する努力が求められる。

日本では江戸時代から、明治・大正まで、農耕中心のムラ社会が形成され、運命共同体として共存して暮らしてきた歴史がある。ムラ社会では、個人の能力よりも組織のなかで与えられた役割を忠実に遂行する能力が求められる。そして、ムラ社会の人間関係を円滑にするためには、ムラ全体で協力し、助け合うことは、大切な事柄である。それは、ムラ社会の一員となる子どもの成長を支援する様々な産育の風習からも伺うことができる。五か月目の帯祝い、産月の出饗・出振舞・出産時の産立飯、三日祝い、七夜、宮参り、食初め、誕生祝い、初節句、七五三の、赤ん坊の生命を保護し成長を確かなものとしようという風習も各地に存在した。明治・大正時代は多産多死の時代であり、出生率は高かったが死亡率も高い時代でもあった。このため、神仏の力やムラ人の力を借りて、乳児の生存を確かなものにしようとする人々の願いが込められていたのである。拾い親、守り親、名付親、元服親、烏帽子親などがあり、出産や育児をムラ社会全体で受けとめ、子どもの成長を社会的に承認し、一人前のムラ人として育てあげようとした子育てのシステムであった（飯島, 1995）。

こうした出産や育児を共同体全体で受けとめ、生児の成長を社会的に承認しつつ一人前の村人として育てあげようとした子育てのシステムこそ、明治初頭に来日した Morse（1917/1970）をして、日本ほど、子どもが親切に取扱われ、そして子どもの為に深い注意が払われる国はない。日本人は確かに児童問題を解決していると関心せしめた事柄であった。彼は、「日本の赤ん坊ほどよい赤ん坊は世界中にないと確信する。いろいろな事柄の中で外国人の筆者達が1人残らず一致することがある。それは日本が子ども達の天国だということである。この国の子ども達は親切に扱われるばかりでなく、他の国のいずれの国の子ども達よりも多くの自由を持ち、その自由を濫用することは少なく、気持ちのよい経験の、より多くの変化を持っている。日本の子どもが受ける恩恵と特典とから考えると、彼らはいかにも甘やかされて増長していそうであるが、世界中で両親を敬愛し老年者を尊敬すること日本の子どもに如くものはない」という。

しかし、既に大正時代には、都市を中心にして、育児ノイローゼによる母子心中事件の増加が報道されている。ムラ社会を離れて都市部で生活する母親の問題として捉えている。要するに、農業社会から工業社会への変化の過程で、農村から都市へ移住した人々は、伝統的な家やムラ社会を離れ、家風や周囲の目を気にせずに、自由にふるまうことができるようになる代わりに、出産や育児に対しては、隣近所の人々からの援助を得られることもできず、孤立した中で、若い母親が一人で産み育てなければならなくなってきたことに原因する。母子心中は支援の手が差し伸べられることなく、思い悩んだ若い母親が選んだ悲しい決断と言われた。

その後、第二次世界大戦後の急速な経済発展、都市化、核家族化の影響を受け、第一次産業は減少の一途を辿り、農村を中心にしたムラ社会は完全に崩壊していった。農業社会から工業社会への変化が、必然的に大家族という群れの生活から仕事と家庭が分離され、核家族化をもたらした。しかも、今日では、工業社会から情報社会へと変化しはじめているが、この変化が核家族から単家族の時代へと、家族の枠組みに大きな変化をもたらしている。すなわち、情報社会の職業労働は、あくまで個人的な作業であって、家族の全員で取り組むようなものではない。何らかの

形で在宅勤務が可能になっても、集中できる労働環境でなければ、情報社会の仕事をするのは不可能である。しかし、家庭を運営する論理と仕事を進める論理は全く異なり、家庭でも可能であるが、きわめて頭脳集約的なものになってくる。仕事は男性や女性といった性別を問うものではなく、生涯にわたって働くことが可能になり、男性でも女性でも1人で生きていける。これが単家族を生み出している（匠，1997）。

出生率の低下，都市部での単身世帯の増加，女性の社会進出など，家族形態の変化を生み，地域社会での交流はますます薄くなり，地域社会から孤立する家庭は多くなっている。親や兄弟以外に子育ての支援を受ける人物がなくなり，家族自体の人間関係も希薄になってきている。このような環境下では，若い母親にとって，育児が厳しいものとなっている。今日の社会変動は，児童虐待を生み易くしているといえる。

引用文献

- 1) Altman, I. (1975) The Environment and Social Behavior: Privacy, Personal Space, Territoriality and Crowding. Brooks/Cole.
- 2) 青野篤子 (1979). 対人距離に関する発達の研究. 実験社会心理学研究, 19, 97-105.
- 3) Ashton, N. L., Shaw, M. E., & Worsham, A. P. (1980) Affective reaction to interpersonal distance by friends and strangers. Bulletin of the Psychonomic Society, 15, 306-308.
- 4) Bell, P. A., Kline, L. M., & Barnard, W. A. (1988) Friendship and freedom of movement as moderators of sex differences in interpersonal distancing. Journal of Social Psychology, 128, 305-310.
- 5) Bower, T. G. R. (1980) 乳児期 可能性を生きる. (岡本夏木・野村庄吾・岩田純一・伊藤典子訳) ミネルヴァ書房. (Bower, T. G. R. (1977) A primer of infant development. Freeman)
- 6) Bowlby, J. (1967) 乳幼児の精神衛生(黒田実郎訳). 岩崎学術出版. (Bowlby, J. (1952). Maternal Care and Mental Health (2nd ed.) World Health Organization.)
- 7) Bowlby, J. (1976) 母子関係の理論 愛着行動.(黒田実郎・大羽シゲル・岡田洋子訳). 岩崎学術出版. (Bowlby, J. (1969). vol. Attachment and loss. Hogarth Press)
- 8) Duke, M. P., & Nowicki, S. (1972) A new measure and social learning model for interpersonal distance. Journal of Experimental Research Personality, 6, 119-132.
- 9) Ford, J. G., Knight, M. & Cramer, R. (1977) The phenomenological experience of interpersonal spacing. Sociometry, 40, 387-390.
- 10) Guardo, C. J. (1969) Personal space in children. Child Development, 40, 143-151.
- 11) 花沢成一 (1997). 育児不安と児童虐待. 児童虐待 家族臨床の現場から. 家族心理学編. 金子書房.
- 12) Hall, E. T. (1970) かくれた次元. (日高敏隆ほか訳) みすず書房. (Hall, E. T. (1966) The Hidden Dimension. Doubleday)
- 13) Hayduk, L. A. (1983) Personal space: Where we now stand. Psychological Bulletin, 94, 293-335.
- 14) 井垣章二 (1998). 第1章 児童虐待の家族と社会. 児童虐待の家族と社会. ミネルヴァ書房.
- 15) 井原成男 (1981). 個体間距離の発達と性差. 教育心理学研究, 29, 227-231.
- 16) 飯島吉晴 (1995). 子どもの発見と児童遊戯の世界. 家と女性 日本民族文化体系10. 小学館.
- 17) 今川峰子 (1993) パーソナル・スペースに影響する年齢・性・親密性・居住地域の分析. 聖徳学園女子短期大学紀要, 第21集, 1-16.
- 18) 今川峰子・讓西賢・齋藤善弘 (2000). 中年者及び高齢者の家族メンバーに対するパーソナル・スペースの検討. 発達心理学研究, 11, 212-222.
- 19) 今川峰子・讓西賢・齋藤善弘 (2001). 家族と住まいの生態学的研究 三世同居における家族メンバーとのパーソナル・スペースと親密性について. 岐阜聖徳学園大学紀要, 第40集, 57-76.

- 20) 柏木恵子 (1998). 社会変動と家族発達 . 結婚・家族の心理学 . (柏木恵子編). ミネルヴァ書房 .
- 21) Kempe, C. H., Silverman, F. N., Steele, B. F., Droegemueller, W. & Silver, H. K. (1962). The battered-child syndrome. *Journal of the American Medical Association*, 181, 105 ~ 112.
- 22) 厚生労働省 (2001). 平成12年度児童相談所における児童虐待相談処理件数報告 . 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 .
- 23) Lambert, L., Essen, J. & Hesd, J. (1977). Variations in behavior rating of children who have been in care. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 18, 335-346.
- 24) Mehrabian, A. (1969). Significance of posture and position in the communication of attitude and status relationships. *Psychological Bulletin*, 71, 359-372.
- 25) Meisels, M. & Guardo, C. J. (1969). Development of personal space schemata. *Child Development*, 49, 1167-1178.
- 26) Morse, E. S. (1990) 日本その日その日 . (石川欣一訳). 平凡社 . (Morse, E. S. (1917) Japan day by day. Boston)
- 27) 根ヶ山光一 (1995). 子育てと子別れ . 子別れの心理学 . (根ヶ山光一・鈴木晶夫編). 福村出版 .
- 28) 西澤哲 (1995). 子どもの虐待 . 子どもと家族への治療的アプローチ . 1995 . 誠信書房 .
- 29) 落合直行 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 . *教育心理学研究*, 44, 11 ~ 22 .
- 30) Schaffer, H. R. (2002) 子どもの養育に心理学がいえること . (無藤隆・佐藤恵理子訳). 新曜社 . (Schaffer, H.R. (1990) Making Decisions about Children. 2nd ed. Blackwell Publishers Limited)
- 31) 渋谷昌三 (1987). 対人距離の発達的变化に関する投影法的研究 . *医科大学紀要* . 4 , 52 ~ 61 .
- 32) Sommer, R. (1972) 人間の空間 デザイン行動の研究 . (穂山貞登訳). 鹿島出版会 . (Sommer, R. (1969) Personal Space. Prentice-Hall)
- 33) Spitz, R. (1947) Hospitalism: A follow-up report. *Psychoanalytic Study of Child*. vol. 2. International University Press.
- 34) 匠雅音 (1997). 核家族から単家族へ . 丸善株式会社 .
- 35) 内田伸子 (1989). 人間発達の可塑性 . 幼児心理学への招待 新心理学ライブラリ 2 .